

用いたACL再建術～ 回復状況ともに良好

EndoButton[®]、脛骨側はInterference screwを用いて移植腱を固定した。

検討項目は①膝関節の前後不安定性を定量的に計測できるKnee Arthrometer(KT-1000)を用いた最終経過観察時の徒手最大前方移動量(前方安定性)の患健差②術後6カ月でのCybexによる膝伸展筋力測定[体重支持指数(WBI)およびその健側比]③競技復帰時期-の3つ。

その結果、KT-1000の患健差は1.0mm。術後6カ月のWBI健側比は74.1%で、競技種目間で有意差は認

められなかった。競技復帰率は97.2%。アメフトの1例を除いて全員が元の競技に復帰した。術後の再断裂が認められたのは37例中1例(2.7%)で、大相撲力士(21歳)だった。再手術は施行せず、保存的治療により、翌場所から再出場を果たしている。

競技復帰までの期間は平均7.6カ月、相撲が他の競技種目よりも有意に早かった。これについて、同氏は「大相撲にはシーズンオフがなく、番付の存在が早期復帰への意欲や焦りにつながった結果ではないか。また、他の競技種目と比べてランニングやジャンプ動作を行う機会が少ないことも早期復帰が可能となった原因と考えられる」との見解を示した。

復帰時の主観的競技レベル)②現在のスポーツ活動状況(スポーツ継続の有無、種目、恐怖心など)。復帰時の主観的競技レベルはアンケートのみで調査し、術前の競技レベルを100とした場合の復帰レベルに相当する部位に線を引いてもらい、その長さから割合を抽出した。

その結果、術後スポーツ復帰は38例中36例(95%)が術前と同じ種目で復帰していた。復帰時の主観的競技レベルは、平均72±26。種目別では、レスリング、テニスが低く、柔道、バスケットボール、フットサルで高い傾向が見られた。

一方、術後2年以上経過した現在のスポーツ活動は、38例中19例(男子15例、女子4例)が継続していた。種目別では、術前に32%と最も多かったバスケットボールの継続率が8%と大幅に低下した。また、90%が術前と同種目のスポーツを継続していた。現在、スポーツを継続していない理由は、特に理由なし42%、社会的理由32%、個人的理由16%で、再断裂が怖いなど膝に関するものは10%だった。恐怖心のある動作に関しては、ジャンプ動作や踏ん張り、ストップ動作が最も多く、ほかに膝をつく、方向転換、長時間のヒール、サイドステップなどが挙げられ、多くの例で怖いと思う動作が存在した。

これらの結果について、同氏は「今回の調査では、特に女子のスポーツ継続率が低かった。また、多くの例で術後復帰しているものの、術後2年以上経過した現在でも恐怖感が残存していることが分かった」と述べた。

～ACL再建術後の長期的なスポーツ継続状況～ 術後2年以上での継続率50%

ACL再建術後の短期的なスポーツ復帰についての報告は多いが、長期的な継続状況の報告はあまりない。江本ニーアンドスポーツクリニック(福岡県)の中畑晶博氏(理学療法士)は、ACL再建術を受けた若年層の患者の長期的なスポーツ継続状況について検討。その結果、術後は95%がスポーツに復帰したものの、術後2年以上経過すると継続率は50%に低下したことを報告した。

女子の継続率は20%

中畑氏らは、スポーツ活動が最も盛んな若年層に焦点を当て、ACL再建術後の長期的なスポーツ継続状況を調査した。

同院でのACL術後のスポーツ復帰条件は、①術後の十分な経過期間[BTB:術後4カ月以上、ハムストリングス腱(STG):術後6カ月以上]②筋力が健患比85%以上③恐怖心がないこと-の3つ。

対象は同クリニックで2006年5月～09年3月末にACL再建術を施行し、術後2年以上経過した189例中、術前にスポーツをしていた15～20歳の64例。調査方法は、アンケート用紙を送付、返信のなかった患者には電話で調査を行い、最終的に38例(男女各19例)から回答を得た。移植片はBTBが29例、STGが9例。

調査項目は、①術後スポーツ復帰状況(術後復帰の有無、復帰種目、